



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 4

PDCA サイクルにおける Check の重要性

ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
医師・医学博士 狭間 研至

薬剤師にとってバイタルサインは「Check」を自ら行うためのツール

医療人が患者さんの治療の中において、PDCA サイクルを回すためには、Check のところでどのような知識や技術を活かすのか、というところがポイントになります。ここに各医療職種の専門性が発揮されるのではないのでしょうか。

例えば、私たち医師は、患者さんの状態を診察して病名を診断。治療方針を決定(Plan)したあと、実際にその治療を実行(Do)します。その後の状態は、適切な時期に再度診察(Check)して把握。前回決定した治療方針の効果や妥当性を考えた上で、次の治療行為に移ります(Act)。医師の専門性は診断学と治療学にあり、これはPDCA すべてのステップで活かされることですが、ことにCheck のところが重要で、解剖・生理・病理・病態といった基礎的知識に加え、治療開始後の状態を確認し、次のステップへと進む診断・治療の知識・技術が問われます。言うなれば、前回診察時に行った自分の決断が正しかったのかどうか、自分で向き合うことになります。これがなければ学びの機会は大きく損なわれますし、成長へのチャンスも極端に少なくなるでしょう。

では、薬剤師はどうでしょうか？ 問診や処方監査(Plan)に基づいて、薬剤師正確な調剤と適切な服薬指導・薬歴管理(Do)をした結果を、どこでチェックしているのでしょうか？

もちろん、「かかりつけ薬局」、「かかりつけ薬剤師」ということは以前からも言われているわけなので、薬歴上、同じ薬剤師が同じ患者さんをフォローしているということは一般的だと思います。しかし、Check が基本的には患者さんとの面談を通じてしか得られないというのが現状です。

本連載のテーマでもあるバイタルサインは、この

Check を、薬剤師自らが自分の手で行うためのツールだということが私のメッセージです。

そして、問題はここからです。すなわち、薬剤師はCheck のときに自らの専門性として、一体何を活かすのかということです。

もし、これが、医師とそれほど大きく区別がないものであれば、薬剤師に限らずあらゆる医療職にとってその存在意義・存在価値は極めて危ういものになります。すなわち、「それは医師でできているので結構です」と断られるか、「医師はもっと重要な仕事をするので、そちらはお願いします」と下請けのような形になるか、ということです。

バイタルサインと併せて専門性を駆使すれば薬剤師の存在意義は高まっていく

薬剤師が他の医療人にならぬ、特に医師があまり持ち合わせていない専門性を有するのはどこでしょうか。私は、薬理学・薬物動態学・製剤学の分野ではないかと思っています。この専門性をきちんと活かせば、看護師が医師と独立して看護の領域を確立し、そこでの活動範囲を広げているように、薬剤師もきちんとその存在意義を認識し活動していけるようになるでしょう。

医薬分業が急速に進んでいく時代の薬局業務、薬剤師業務の中で、この薬剤師特有の専門性を活かすところは極めて少なかったのではないのでしょうか？

しかし、バイタルサインを薬剤師が採ることで、それらのデータや問診から得られた情報をもとに、薬剤師ならではの専門的知識を駆使して患者さんの状態を評価する。これは薬物治療の効果のCheck という、医療において極めて重要な部分に占める行為になります。

自分が調剤した薬物の確認をすることから、活動の質を高めていくことができるのではないのでしょうか。